

京都精華大学

二〇二五年度入学者選抜 試験問題

座席番号								
------	--	--	--	--	--	--	--	--

【小論文】（2月6日）

時間 14時30分～16時

【注意】

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子や筆記用具に触れてはいけません。
- 二、試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は黒芯の鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（電動式・大型のもの・ハンドル付きのものは不可、鉛筆使用者のみ）とし、それ以外の使用は認めません。
- 三、携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ICレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。
- 四、試験開始の合図により、試験を始めること。
- 五、解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
- 六、採点者が解答を読むように、できるだけ丁寧に文字を書くこと。
- 七、試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置くこと。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立つてはいけません。
- 八、問題冊子および解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

【問題】

次の文章は、石川伸一『「食べること」の進化史』（光文社、二〇一九年）からの抜粋です（出題の都合上、一部変更を加えています）。文章を読んで、それに続く設問に答えなさい。

未来は、食が多様化し、選択肢が多くなる可能性があります。コロンビア大学教授のシーナ・アイエンガー氏は、「食料品店でジャムを選ぶのでも何でも、何百もの選択肢に心を麻痺させられて、選択を放棄して逃げてしまうためスタンダードのものを選ぶ人が多くなっている。選択肢が増えすぎると、われわれはお手上げになる。こうなると、選択は人々を自由にするのではなく、弱らせる」と述べています。「選択肢がありすぎると不幸になる」という、「選択のパラドックス」と呼ばれるものです。

また、社会には、遺伝子組換え食品や人工培養肉といった新しいテクノロジーで作られた食べものへの「不安」も存在しています。食に関するテクノロジーのひとつの特徴は、受け入れられるか否かに人の心理が大きく影響することです。これが電子機器のテクノロジーであれば、私たちは「新しいもの」優れたもの」と感じる場合が多いですが、食の世界では、そうとは限らず、むしろ新しい食べものにリスクを感じる場合が少なくありません。

客観的に食の未来を予測することは、食の選択肢が多すぎることや、未知の食テクノロジーの登場といった「食を思っ て不安になること」を和らげることにともなわれます。

新しい食に不安を感じる一方で、おいしいものが食べたい、何か新しいものが食べたいという「期待」は、好奇心を刺激し、人類の祖先が絶滅の危機に瀕した際にも威力を発揮しました。氷河期に、赤道付近は乾燥化が進み、アフリカにいた人類は窮地に立たされました。植物が枯れ、動物たちも激減したことで、人類は深刻な食糧難に見舞われ、食べものを求めて移動を余儀なくされました。人類の祖先の一部は、慣れない土地で、それまで食べたこともなかった貝などの海産物を食べ、それぞれの土地で手に入るものを口にしました。それは必死の選択でもあったのですが、この好奇心やチャレンジ精神が、私たちの祖先の生き残りにつながりました。その好奇心は、未来の食にも関係していくでしょう。

人類の長い歴史の時間軸で考えれば、たくさんの食べものの中から自分の食べたいものを選ぶようになったのはつい「最近」のことです。人類は250万年にわたって、植物を採集し、動物を狩り、食物にしてきました。これらの動植物は、人間の存在とは関係なく、繁殖していました。しかし、1万年ほど前になると、私たちの祖先は、より多くの穀物や肉を手に入れるために、種を蒔いて、作物に水をやり、動物には餌を与え、草地に動物を移動させまし

た。イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、ホモ・サピエンスが文明を築いた重要な3つの革命として、認知革命と科学革命とともに、この「農業革命」を挙げています。

しかし、人類はこの農業革命によって、「手に入る食料の総量を増やすことができたが、実際はより良い食生活をもたらしたとは限らず、人口爆発と階級格差の誕生につながった」とハラリ氏は語っています。平均的な農耕民は、平均的な狩猟採集民よりも苦勞して働いたのにもかかわらず、見返りに得られる食べものは劣っており、農業革命は、「史上最大の詐欺」であつたと言っています。

農業革命以前の狩猟採集をしていた際の人類は、多種多様な食べものを食べ、小麦や米などの穀物はその中のほんの一部を占めていたに過ぎませんでした。それが農業革命後は、穀類が食事の主体となり、現代の私たちの食生活、身体、そして社会全体にも影響を及ぼすことになりました。

農業革命によって、小麦、稲、ジャガイモといった一握りの植物が世界中に広がっていきました。たとえば、1万年前、小麦は、中東の狭い地域に生えるただの野草のひとつでした。それがほんの数千年のうちに世界中で生育されるようになりました。それらの植物からみれば、人が小麦や稲の栽培を能動的に行ってきたのではなく、「自らの種の保存に有利な形で人を操ってきた」と言えます。食が私たちを改良し、その結果、私たちが「食の産物」として「進化させられている」側面があります。

約700万年前、私たちの祖先の人類は、チンパンジー類と分岐し、初期の人類であるアウストラロピテクス属を経て、今に続くヒト属へと進化しました。その際、人間になれる可能性のあつたヒト属は25種類ほどいたと言われます。しかしそのうちの1種、つまり私たちの祖先であるホモ・サピエンスだけが今日まで生き延び、残りはすべて絶滅してしまいました。

ホモ・サピエンスと同様、生き残る可能性の高かつたのが、ネアンデルタール人です。ネアンデルタール人はアフリカからいち早くヨーロッパへ移動するなど、ホモ・サピエンスの最大のライバルでした。また、体のサイズや腕力もホモ・サピエンスより圧倒的に勝っていました。しかし、ネアンデルタール人は最終的には絶滅してしまいました。

なぜ、ネアンデルタール人が滅び、ホモ・サピエンスが生き残つたのでしょうか。理由のひとつとして考えられているのが、「食性」です。残された骨の酸素や炭素の同位体比を測ると、ホモ・サピエンスは、何でも食べていたことがわかっています。急激な気候の変化などで食べものが少ない環境下であっても、ホモ・サピエンスは「雑食」となったことで、飢餓のリスクを減らし、その結果、あらゆる地域に棲み、繁殖し、そして農業まで始めるようになりました。

た。

しかし「雑食」を選択したということは、同時に「ひとつの食品を自分たちにとっての唯一の完全食品とする」のを捨てたことを意味します。ホモ・サピエンスが雑食を選んだ瞬間に、私たちは「今日、何を食べようか」と考えることを宿命づけられました。

私たちは何でも食べられる雑食動物だからこそ、食べものや食べ方を間違えれば、身体は肥満や病気になります。雑食になったことで、食事の選択肢は増えましたが、食べものを選ぶ悩みも増えたといえます。

イギリスの結晶物理・生物物理学者で、20世紀最大の科学啓蒙家の一人であったジョン・デスモンド・バナールは、1929年出版の著書『宇宙・肉体・悪魔』の中で壮大な人類未来論を展開しています。

タイトルの「宇宙・肉体・悪魔」とは、人間の頭脳の創造活動に基づく人類の未来の進化を妨げる「物理的」「生理的」「心理的」な制限のことをそれぞれ指しています。つまり、人の環境、身体、心の制限を取っ払ってしまえば、人類がもつとさまざまなブレイクスルーを引き起こせるのではないかと暗示させる表題です。

食は、バナールが指摘した「宇宙・肉体・悪魔」を実際に変えてきました。すなわち、食べものが、人の健康や病気による「身体」、社会の思想やアイデンティティ、個人の心理という「心」、農業、キッチン、食卓などの「環境」を変化させた大きな要因となっています。

前述したハリリ氏は、ひとつの戦争で歴史が変わることは非常にまれであり、実際に歴史の流れを変えてきたのは、偉人でも英雄でもなく、小麦、米、トウモロコシといった穀物や、大豆、ジャガイモのような農作物の普及だったと言っています。

ヨーロッパ人がアメリカ大陸を発見し、征服に至ったのは、アメリカでジャガイモを発見したからです。当時、南アメリカでしか栽培されていなかったジャガイモをヨーロッパに持ち帰ったことで、やがて世界中に広まりました。今日、ヨーロッパ、アジア、アフリカのほとんどの地域でジャガイモが食べられており、ジャガイモのない食生活は考えられません。日本でも大陸から渡って来た稲が、私たちの食生活を変えただけでなく、年貢という税金となつて社会制度の基盤を作り、原生林を里山へと変え、人間の体型をも変化させてきました。

広い範囲で人々の人生を変えたという点で、過去のいかなる戦争よりも、ジャガイモや米といった食べものの方がはるかに強い影響があったといえるでしょう。

〔設問 1〕

「農業革命」とはどういうものか。筆者の考えを三〇〇字以内でまとめてください。

〔設問 2〕

筆者は、未来の食には不安と期待が入り混じっていると説いています。これからの食生活はどのように予測しますか。本文を参考にしたり、あなた自身の経験に即したりして、あなたの考えを五〇〇字以内で述べてください。